# H小学校参観記

天　笠　　茂（千葉大学）

## １．総合的な学習の時間で育つ子ども達

### （１）H小学校のプロフィール

２００３（平成１５）年3月、H小学校を訪問する機会を得た。同校は,明治６年に創設され、１２９年と歴史と伝統のある学校であり、S市の中心部の旧市街地に位置し，オープンスペースを持った学校である。

同校の学校規模は、各学年１学級の単級学校（１年２４人，２年２３人、３年１４人、４年１９人、５年２２人，６年１７人，特６人）で、全校で８学級１２５人であり、小規模な学校である。

同校の教育目標は、「新しい時代を拓く，確かな学力を身につけた心豊かでたくましい子どもを育成します。」（２００３年度）である。また、めざす学校像として、１．子どもにとって「勉強はよく分かるし、友達と遊ぶのが楽しい学校」にします。　２．教職員にとって「自分の持ち味が十分に発揮できる、やりがいのある学校」にします。　３．保護者や地域社会にとって「なかなかやるわいと、感じられる学校」にします。　を掲げている。

さらに、めざす子ども像として、日常の中の困難を自ら乗り越える強い意志を身につけた子どもを育みます　・深く考え、進んで学習する子どもにします　　・心身ともにたくましい子どもにします　　・思いやりがあり、協力する子どもにします　をあげている。

### （２）総合的な学習の授業参観

午後２時近く学校を訪れ、早速、K校長の案内のもと、１年から６年まで各学年の教室での授業を参観した。そのうち３年、５年、６年の３つの教室では総合的な学習の時間の授業を見ることができた。３年と６年は環境や国際理解に関して,これまで調べてきたことをクラスの仲間の前で発表し聞いてもらう場面に、また、５年は、発表会に向けての準備として話し合いの進め方について指導している場面に出会った。

わずかな時間であったが、授業を参観して、子どもの姿に接することができた。後に取り上げる、同校が編集した校内研究紀要のあとがきには、教頭の言葉が残されており、その中には同校の子ども達の姿について次のような記述がある。すなわち、「本校の子どもたちは、自分で考え、自分の考えを持ち、それを自分の言葉で表現することができ、自立と自律の芽を持つまでに育ってきています。」と。ここまでなかなか書き切れないものであるが、これが誇張された言葉でないことを、その子ども達の姿と重ね合わせることによって確認できた。

よく総合的な学習の時間で育てたい子ども像とか，育てたい資質・能力の一覧を目にするが、どうしても抽象的で具体性に乏しいとの印象を持たざるをえなかった。しかし、H小学校の子ども達を目にして、総合的な学習の時間を工夫・努力することによって育つ子ども達の具体的な姿を描くことができた。

では、同校の総合的な学習の時間とはいかなるものなかの、また、そのような総合的な学習の時間を生み出し支える学校の体制や組織運営はどのようになっているのか。同校の総合的な学習の時間の特徴およびそのマネジメントを探ってみることにしたい。

## ２．総合的な学習の時間の特徴

### （１）一つのテーマを一年間を通して追求する

同校の総合的な学習の時間は、各学年とも１年に一つのテーマをやりとおすところに特徴がある。例えば、４～６月にかけて学級担任は時間をかけて子ども達と話し合い、テーマを見つけていく。続いて、テーマを決めた後、６～１０月にかけては共通基盤づくりをめざし共通体験を何回か実施している。そして、１０～１１月は個人課題を明確にする活動期と位置付けている。さらに、１１月以降は、明確になった個人課題を追求し、その結果を発表しあうとしている。

この間、一人一人の担任教師の個性や持ち味,課題意識が大切にされている。まさに、総合的な学習の時間は、一人一人の教師の持ち味や課題意識から生まれたものである、というのが同校の説明である。

一年間を一つのテーマで展開するには、教師にかなりの指導力が必要である。それが可能な教師集団の存在。そこに同校の特徴があるといえよう。

### （２）教師と子どもで創る真の教育活動

総合的な学習の時間についての同校の考え方が,教頭の残したあとがきに示されている。それによれば、総合的な学習の時間は、教師と児童で創る真の教育活動であり、それはまた、知識量ではかっていた学力観を学び方・生き方を含めた確かな学力観へ転換させる鍵を握る学習であるとする。そして、総合的な学習の時間は、すべてが手づくりであって、それゆえに、教師自身の人間性・人生観・教師観が問われるとしている。

一人一人の教師の人間性・人生観・教師観が問われる教育活動として総合的な学習の時間がある、というとらえ方を同校はしている。

### （３）学力低下問題に総合的な学習の時間をもって挑戦する

同校もまたマスコミを通して流される学力低下情報から無縁ではいられない。ただ、他校と異なる点は、総合的な学習の時間の積み重ね，継承を通して、この問題にアプローチしようとしていることである。

一部に総合的な学習の時間は学力を低下させるとの風評が流れている。しかし、そのような心配が杞憂に過ぎないことを，同校は実践を通して明らかにしている。標準テストでは学力の低下は認められないことを、結果は良好であったことを小室校長は語っている。

このような点において、同校は、まさに望ましい総合的な学習の時間を実施すると学力の維持・向上もはかれる、という仮説を実証する学校であるといえよう。

### （４）『総合的な学習をどう創るか―導入から評価まで―２００３』（２００３年1月刊）をめぐって―「あってはならない総合的な学習の赤本」―

一方、同校では、『総合的な学習をどう創るか―導入から評価まで―２００３』というタイトルのもと校内研究紀要として冊子にまとめ、公開研究会に際して来校者に配布した。

この冊子に同校の総合的な学習の時間がよく示されている。すなわち、冊子は各学年の一年間の及ぶ、ダイナミックな実践の展開を収録したものである。同校は、この冊子を自

負心をこめて「あってはならない総合的な学習の赤本」と称しているのである。

本書の構成は、４つのパートに分かれ、その中に２００１年度の各学年の実践が次のように収められている。

第３学年　大すきＳ、たいせつな町―みんなでめざそう、Ｓはかせ！－

第４学年　地球はみんなのたからもの

第５学年　みんなのため　子孫のため　未来のため

第６学年　夢をはぐくみ自分の生き方を見つめよう！パート２

－２１世紀のプロジェクト１７－

また、本書に収められている実践には、以下の６点の特色が散りばめられている、と同校は説明している。

① 子どもに育てたい力を４観点９要因で年間指導計画に位置付けている。

② １年間かけて完結する学びの連続性のある大単元構想で、本校なりの単元展開の基本的なパターンである。

③ 教師の個性を発揮した,１年間を見通したカリキュラムデザインをしている。

④ 子どもとの対話を十分に取り入れた展開をしている。

⑤ 育てたい力がはっきりすることで,評価がしっかりできている。

⑥ 本物との出会いを大切にすることで、子どもの心情をゆさぶり感動体験のある学習が展開され、生き方を考えるまで高まっている。

そして、「あってはならない総合的な学習の赤本」と称する所以について、総合的な学習の時間に戸惑う教師に対して、自分達の実践を伝えることを通して手ほどきをしたいという思いがそこにあった。すなわち、あとがきには，次のような記述がある。

「手づくり教材開発経験のない先生には、これほど大変なことはないのです。ゆえに実践に差が出て,悩む先生もでるわけです。」と。そのような悩む教師に対して、もし、カリキュラムデザインや総合的な学習そのものが分からなかったら、本書の実践を自分流に置き換えて一度試してみてはいかが、と呼びかけている。そして、２年・３年と実践を重ねることによって、「私の実践」ができるようになり、きっと手ごたえを感じるでしょう、と述べている。ここには、総合的な学習の時間を創る自負心と，リードしようとする同校の前向きの姿勢をとらえることができる。

３．総合的な学習の時間と学校経営

このように同校の総合的な学習の時間は、一人一人の教師の指導力に負うところが多分にあり、優れた指導力を有する教師集団によって開発され展開がはかられてきたととらえることができる。という意味において，同校の教師一人一人の指導力にもっと光をあて，分析する必要があると思われる。しかし、この点については、他の機会に譲ることにして、総合的な学習の時間を支えるマネジメントについて注目したい。

（１）校内研究・研修の体制

まず、同校の校内研究・研修の体制を取り上げてみたい。同校では，校内の研究・研修について、学校研究、個人研究、基礎研究の三つのタイプを存在させている。それぞれについて，次のように説明している。

学校研究：これまで積み上げてきた「総合的な学習の時間」の実践研究を継続します。

これまでの「総合的な学習の時間」の研究結果をまとめた本を出版します。

小学校における英語教育について実践研究します。

個人研究：「自ら向上させようと努力する教師になる」

「自らの教育課題」の研究

S市教育課題発表会や教育専門誌で発表し、さらに自らを高めます

基礎研究：新たな小学校教育の可能性をさぐるための基礎研究を続けます

「小学校における情報教育について―2年目―」

このように、総合的な学習の時間の実践研究の継続と個人研究の重視が同校の特徴である。学力低下と基礎・基本の徹底への対応として、総合的な学習の時間への取り組みを学校の看板から下ろす動きが目立っている。このような中で、総合的な学習の時間の継続を実践研究の柱にする同校の姿勢は注目してよい。

と同時に、研究を支える体制,個の重視ということも注目すべきである。教師それぞれの個人研究の重視をもとに実践研究の積み重ねをはかっていく、このような研究の方向性と体制に同校の特徴がある。

（2） 3年から6年までの持ち上がり

一方、同校が一学級20人前後で、クラス替えのない小規模校あり、総合的な学習の時間の「持ち上がり担任」が可能であることも注目する必要がある。3年から6年まで持ち上がりが可能であり、実際に、そのような担任歴を持つ教師が同校に存在している。

総合的な学習の時間が課題の一つにしているところに、学年間の接続があり、その追及の弱さがあげられる。これに対して、学級担任の持ち上がりによって学年間の溝を埋め、学年を積み上げていく総合的な学習の時間のノウハウを開発していったものとみられる。

（3） 教師の自立なくして総合的な学習の成立なし―校長の経営理念・哲学―

「一人一人の教師の真の自立なくして特色ある学校づくりも豊かな学びの構築もありえない」というのが、K校長の学校経営の理念・哲学である。すなわち、教師の自立なくして総合的な学習の時間も成立しない、という校長の理念・哲学が、同校の総合的な学習の時間を支える基盤になっていることは確かである。

また,このような校長の経営理念・哲学は、放課後の扱い方にも具体化されている。すなわち、同校では、毎日の放課後の時間を各教師の自由裁量の時間として最大限確保するよう、会議や各種委員会の開催をできるだけ押さえる努力を重ねている。

このような形で教師一人一人の自立をはかっていく学校経営の存在があって、先に見た総合的な学習の時間の開発と展開があることを確認しておきたい。